風朝発句集後編

上

さらのほん

水よ鑿ちかたきもの雫滴るも
こなたく岩を砕く石筧穿ち
碓不能穿ものも勢碓乃強の志
らをうりて果もまた車も砕く
角ーをも風吹居士をたぶぬひの

[illegible]より出家し給の時吾妻へ
[illegible]里[illegible]に一朝の化を九[illegible]
かの玉水乃[illegible]
[illegible]七十年の[illegible]
[illegible]妙境[illegible]高峯の

投[illegible]あ事を[illegible]
指[illegible]て今[illegible]世不[illegible]
居士この事[illegible]骨を[illegible]
[illegible]旦八水[illegible]
[illegible]

正雪のまゝ門生ホの心ゆを養ふ

述百年志の程

この布庵遺測

鳳朗發句集後篇上

春の部

歌且

奈良墨の表八ゆよりの青丹はし

塔ゝ手枝房ゆよ八俊授ゆき

正月

西月の寶ゆ出さの鈴ゆき

元日

元日の月隅くまゝ五の下

世の中よりの元なのみよりの
元和年 飯一粒より出たるなり

日蝕 初日

今年はいつる降もみしりの出たる
出産なの初なる人の心きりの

初宣 初鳥

初宣年一歩さ霞老人角もんて
二日より降ちきる初のうた

氏降 若水

教のうハ氏降てみきの地永く
口の水年人ハ絲ちた仮仕舞
美水もちくよ陽ものて仕箱今

門松 氏芸 年始

門松よ芸のちゑんや二日自
宮ちれ門のみきの氏芸永
今日ハ先ん実きりて垂連始年

賀初 福寿草 手鞠

賀ちゑんや張ものく小と張の面

ゑてとまのまちをさるを福寿草
の先てるを踏行まちの家
仏壇に菊もせぬを箱に入

松の内

寿る僧ハおよろこ　松の内
指をれハきのふきりあり　松は内
迄と結束ゑくしきを松のうち
松をてみ門ゑ一　二　三日

子日　小松引

遊子のを付ゑ休もを男子ゑ
ゑ〳〵の野をさまきるを子ゑ小
結て拿のつきぬ小松の引ユ者
手次をよ植るのもゑ小松に
野を惜て引もを遊子小松ゑ

七種　若菜

七ゑ草　ゑを結て寿ゑ書き
ちゑをハゑの河とゑる若菜に
庵丁て押て入るりの菜小

蕎麥

山かけよ春より秋の多き蕎麥畑　蕪村

山のうちを行る門前うら一面蕎麥畑　蕪村

縣召

行くさの梅のちりをはらひけり

義入

出向て義入まつや蕎麥畑

濱まで出る義入の咄し哉

異変

何事ぞの春雨や異の変

水漂や　俳諧是　俳諧の変

余変　俳諧の変

名ばかりを拾て拾て余変哉

きしくと鳴る帯蕎麥畑余変

鶯も鳴て　鶯是　俳諧の変

山伏の笠ぬぎ捨てし藤棚
高くとゞかぬ花むやみ夕霧
脱ぎすてし笠の花の藤棚
霧ふと散りし花の名の名
僧侶のしつらふ角の寺毎に
何陸の國なる峰よりて
日の峰や寄せ合ひの岸の花
秋霧の残るもの花の名
阿美　山笑

阿蘇や消ぬ袁生の井の清
ゆゝしきこの人陸や　山の笑
長冬　龍
冬冬さよ通りぬけ人家の
うゝこのよきほうる脱ぎ小
龍午　多ぬ笠　山の紙
日永　春日
寄せ合ひ笑ふ
永きるや　澤て八龍の巻

[illegible]の戸[illegible]て出て行る春の小
上野より出る春駕も春の名残
春秋　春雪
春の秋や春雨[illegible]
[illegible]の[illegible]
山[illegible]ハ出ぬや[illegible]春社
春風
春雨の車[illegible]て春の風
[illegible]て使て[illegible]の風

春風より[illegible]小土器
[illegible]の家一[illegible]
春風や[illegible]拜社五尼
春風の[illegible]四ツ手
人より付て山門入るや春の風
春の[illegible]や[illegible]
[illegible]風や[illegible]水も行
春雨
春雨や[illegible]の[illegible]山

[illegible]人をやとひよゆるやまるの雨
[illegible]ぬらし〜ねぬ〜春の雨
きぬ伊や歩き[illegible]まるの雨
燈の[illegible]りよ[illegible]見えて夜の雨

春水　妻門

[illegible]風のさつて迫きぬ妻の水
妻の水猫の乗出し[illegible]
妻の[illegible]土紙の[illegible]
水の[illegible]て水[illegible]妻の門

梅

[illegible]乗出した梅の[illegible]
自[illegible]ぶあて[illegible]の[illegible]
梅[illegible]
[illegible]一[illegible]
梅[illegible]の[illegible]
蔦師や牛の[illegible]梅の花
白きの八重の[illegible]
糸[illegible]母[illegible]

四月廿五日

先梅を向けて行目を通して見三角もなぬるもの白し梅の花梅もなきに庫よりかすてきる和歌枝もなく行鶯の家をうめのむ

見るよりも久しく梅は花

芳野行柳別會

陸奥て梅の咲くを聞て

横井也行

我住ハ嶺よりそう出て空中よ

柳つくる人家の梅を見

下しよ梅多くて赤そう

積雪の上よ咲るか地を

探梅

探よ見きれぬ梅のむ

紅梅

紅梅の上よるうる白る雪

柳

春立て芽をめて蓄る柳の葉

古傳と云る冒よ白の柳うゑ軍
叢枯てうしろの生木柳小
能かして枯るの遊ぶやれきに小
明くまるとうゑ先うる柳あり
村生てみるようまさる柳茶

柳最不被著他

明ぬ冒小雪も結ぶ柳うゑ
生き生きのつてるの冒る柳茶
白能よ三時もうるやなきに小

椿

冬柳拙てきる柳のしつくうゑ
さ柳 枯多ゑも生茶初ぬ
去年生年九年も枯柳あり
枝明ぬ弱さ花ぬ如みきうゑ
ようきと枝深多る柳茶
柳能と枯を生ぬ柳もあり
冬小生て茶戸ゑ一夕柳
一日て稀も明ようしうゑ柳

蕨ぬるハ拳の所つまる様なり
春の山を踏て一のもゝ蕨 様
小様 庭に出て見るよりは
一茎も蕨きるよゝ赤つき
所にうゝ春の葉の伸るつきに
き枝つ出てきゝて蕨 様
ぬるのも回り色ある様 一の形

若草

若草や 椿よりきハ立る春の
ひの子をおゝ城にて所 見る
春草 蕨の芽
孫春もうゝあて八分一 実の芽
伸うゝハ曙の人のゝ 蕨のうゝ

蕨

うゝい春の庭のむく方やよりの匂
黄色や 花咲る所 結うゝ
芽子 蕨の久しき山家 見

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雛子

[illegible]

雛[illegible]

[illegible]

[illegible]

雲雀

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

猫の恋

黒猫の眉のごとく雪の窄ゑ
通ひ来て夫の家の猫となりぬ

白魚　鮯

白魚のちひさき背ゆ新月
考へ魚八廿日を生のうゑ
白魚や えひをひらもあらはつま
鮯の舌の先なり　不老門

飯蛸

下結ひ足に夏の子供茶

きさらぎや傳へ来る陽の水
ちらばりて京にちらちら二月八

初午　風　麦納

ちりをやて麦うつゑと紙の札
蕾の風ふるゆの松よりまよひ
手納ちハ行き去よ行きにけ

初虹　霞月

ちつ虹やきらきらとゆる峰の雪

家今よりつくるわ　篠白
山科も　殺ハゆうと　紙ろ

豆立

そ毛ちよ　殺つるわ　庭序

葉花　菜苗

山角とわ　葉の毛とも　ハ打
葉の毛の上よりつる　土橋ろ
葉の毛を出てうつも　庵菜
葉の毛よ　家ちはしる　梯角

燈の下わ　葉の毛書の作りみき
葉の毛よ　絶刑しる　紙鞠小
苗のうちぬ　ちぬ庭の　菜

帰雁

春の雁　名字ちる　殺ハ行よ行
ちと時ハ　章のつきき　雁の殺
うき字布　追ぬ　まて　新もなく
行雁わ　ちれる　松ハ　殺行ら
うあ雁の　ちる　庵一　畑ろ

丁の鈴吉の子孫にて長谷の
鈴吉まと遊女夢の丁屋の
屋八千代つくなと奪ふよう
大門の一番屋の名称なし

燕妹

妻恋する万代の乙女哉
初妹や帝参り行屋敷
堅遊ひを我と賞ふ小妹なし
名ふ恋ふ行う山の妹

雀子

恋ふる白飛ぶ雀ぬ雀子
雛ふ生成ふ子恋の子
親鳥て白ふぬ孔ふる雀哉

蛙

飛ぶて佳ふふ生ふ蛙
ふふぬふ風荒ぬ初の鳥
子の恋の恋の揺ふ新ふ蛙事
降遠の恋ふ降ふる蛙来

苗を水田に植つくるの事小
自然に地蔵の生ずる植方
時を下て山も多けるる植方
古今小植の事も本の百姓

田螺

蓮のくさ枯傾りやうて時田螺
結て稍長てもあり四月
賣買よ出ぬもあり雛方

雛

うれ行雛も市のうれあり
新らしいのにむかしの雛
仔寸

京の僕より毎年
中くだかれて
仔寸る市鶏百の手数陸路
子を為さく鳥の事を仔寸小
係せ二百赤種の雛四よりあり
俗の上市 ひるの所寸も養千入

花櫻

結ぶかと花にくまてむすぶかな
初花や待つ人もなきつぬ
義梅をたてる花と初はるら
せんてもや本の百姓をまつ櫻
花の山若葉をつゝみつゝ春
むすぬ日の雲せきと上雲の花
花の日よ合さるみき枯木小
花多きかて咲ゆ花一本

雨ふるや屋根よりふる花の雪
花七日ふるを宮中のみ寺

本無寺

永禄の年にて陸奥の花見小
供出て新なる花見あり
ふるして見ても無やみの中
ゆるもぬ盃うけて花見哉
口ひるも ふるもむの見梅小
引まる所 庭のむるうしろ梅

咲く花見人も見ゆる暮しに
鶏のふけり跳るやも雪吹
其の花後一ときにふれ率利
見るなり見ぬ者花に花ゆすり
初手かうと思ふも花も芝なれ
花谷て風にまう立ちなし
　幸れなる大木に枝焼て
見掩るや花のあとしの拗除焼
花に唐寺の落つぬ哉なかぬ

柳澤村岩上の神社は大和の國
石の上をうつしまつれる旧地と寥は
蔣石をうつして分宮をまつれは
重なり幾代の花のさく是石
よるもの庭石や物しる山
六なめのきしみえるゝるき外見は
隠しさへ處も及はぬきよらかは
松山も外見への鳥見のみえし外
るの落るなにのこ華何か櫻の角

[illegible]人[illegible]ねハ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]日[illegible]等[illegible]ぬ[illegible]ハ
[illegible]ても[illegible]ぬ[illegible]
吸[illegible]の[illegible]を[illegible]山[illegible]
[illegible]と[illegible]を[illegible]の[illegible]ハ

梨子花 山吹

人[illegible]の[illegible]や 梨子の[illegible]
山吹や[illegible]の[illegible]

連翹 桃 藤

[illegible]の[illegible]ぬや[illegible]
[illegible]の[illegible]や 桃[illegible]
[illegible]名の[illegible][illegible]の[illegible]
杖[illegible]と[illegible]の[illegible]や[illegible]の[illegible]
[illegible]せハ[illegible]の[illegible]ぬ藤の[illegible]

菫

[illegible]ぬ[illegible]や[illegible]や菫[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]

廉落角寫

春雨

行春

行春や雨もうるおうきの芽

春雨て山と思ふや雨の山

行る影人千鳥る

さ一文字もの春も書よう

永き夜と春の中も引き乱

朝詠

春の夜の廣うあり水の上

切剥て水ゆる春の山山あり

かのくと春よ惜みく堅松小

夏の部

四月

白扇のうみ山一もく四月哉

更衣　裕

唐土山より響きれて夜の雨
思ひいつ次の其ぬれ中　更衣
たちくらとたちぬ下人　更衣
更衣のまり　一寸下る丸
薛き変のはてきをつて　更衣

秋の月を鳥ゑ出れ中　衣の人
釣殿に　逢遠の　衣
水新のゆらくとさた裕丸

素麺

白の玉てうの瓶白中素麺
恍惚特を出ひとたり素きれ

短夜

明易き秋を竹の男丸
うゑ秋を四六月の此

夏月

人丸より歌仙揚迄　春の月

門ちかき人待ぬなつの月

春山　春曙

雲にうつるうすぎぬ春の山

春の曙や月は消り虹の橋

春立

白まれや星のきやうよ春立て

義仲氏ノ春上の松より歌

春雨や松よりくへや保ろろ

佛生會

晩の雲仏は生れあまいろ

牡丹

曽我ものゝ同のうし牡丹角

一ツつゝ人のうけ行あるあ

衣の袖ゝのえて祝ん牡丹あり

為ものゝ人のよきまる牡丹小

牡丹人の留錦つくやなの七ツ

若葉

雲雀なと名ゆゑ布美葉哉
牛ふきの蕾ゆりて行ゆく葉小
蕾和るゆりて来るあきつの葉小
恒相ゆ下糸の地よせぬ若葉小
面い地の若葉ふれや飯の板
若葉ふくらきの来るや春ふ船
見ぬ若葉ふ若葉ふ実 林
皇角の針も跡ふて若葉せ

夏木立

古敷ふつん船小ふ来て夏木立
何ふ木ふくても茂る小隅小
表四ふる夏ふ茂ふ跡ふ

葉柳

風ふくふく葉柳ふて仕菊ふ
紐ふふ若葉のふふき柳小

橋若楓

橋の香のふふやゆふ

[illegible]

杜若　一八

山園の色よりうつろひて
物うき雨の降り下る初の頃よ　杜若
つゝと伐る女ぞうらゝ　杜若
[illegible]の縫ふ[illegible]も　杜若
一八や　[illegible]の[illegible]

菊花　卯花　蕨花

中見[illegible]る中山峰迄　菊の色
葉の[illegible]
色の[illegible]
義よりうら　菊
[illegible]や　[illegible]の[illegible]
卯の[illegible]
[illegible]の[illegible]を模[illegible]
[illegible]
自[illegible]

[illegible] 萩

立葵　夢　書秋

[illegible]や[illegible]ん　立葵
[illegible]むかしの[illegible]　小田雪
書秋の[illegible]や角田川
[illegible]つくや　秋立書の[illegible]

時鳥

[illegible]る隈も[illegible]
[illegible]て仕舞ぬ[illegible]

[illegible]　杜宇
[illegible]　杜宇
[illegible]　時の
[illegible]　時の
[illegible]　杜宇
[illegible]　時の
[illegible]　時の
[illegible]

そゝ丹や そゝ書や 書の杜鵑
来て啼てみるよ 飛ぬ行こゝ

鴎鳩

失ものゝ やうなり 秋の この鳥哉
在事も うつて 水の 宗吉哉

老鶯

うぐいすや 老ぬ ゝ 十 歩を 啼
名 杜 来

鶯ハ老ても 啼 行 と 学

行子

ちつ 啼 の 丁 寞 も 色 行 子
地 行 ゝ の 爲 々 を 消 ち や 行 子
跡 ハ 行 ゝ ま と 為 る 人 の 行 と 子
田 の 彩 子 を し と 沈 も 色 行 子

鶏

義 る 寞 も 寞 も 如 つ に 鶏 の 毎
幻 と 義 て の 行 る 鶏 の 大 丸
鶏 も 跡 を 乱 果 る 拾 子 茶

面白きはうを吹る物門ハ

初鰹

ひ市市や寺遠いよ初松魚

大きなる方屋敷ほし初ろ毛

蛍

投ぶてをするまるや池の淵

袖ふれハうしろへまるをするハ

蠅 蝿虎

おすまつ我生も蝿の飛ぶ

機市 蚊も赤き笠のうへ

赤白子々牡丹本当旅門の吹

多くとなる人笑しぬおのれ笑えるき

よ市を込きまま雪仏ハ生拾

白となる水一奥多

裏を蚊と蝿ふ蝿よ見ろ仏多

蚊 蚊屋大

蚊ちらと一ホふるぬ雪の虹

手ちらと蚊と蚊の出の白衣ハ

はすてゝ花屋の門なる百合
哉　ゝ仏八幡の灯よみる牧野小
秋去よの世ぬけうの牧生ゝ
雪霜ゝけるや牧生の紙の雨
往来のむせる寿きる牧生小

讃州居通る

毎ゝまるや屋敷浦の牧生新
文る香の家姉ゝもみき牧生小
世の中の抱よ牧やのほゝ山

金城よゝまつてゆる牧やり茅
掃ゝ先へ行るのゝ牧や屑

飛鳥

木陰ゝ丁牧ゝむ夏のゝ牧小
抱ゝゝ行ゝ夏ゝるや徳国町

五月

木のゝ百りる屋ゝゝぬゝ立月小

端午懸粽

加茂ゝ系一里ゝ行ゝの端午小

[illegible]

五月雨

五月雨や麻の葉嗅き人よ逢
[illegible]
五月雨よ[illegible]る蓬[illegible]
[illegible]
[illegible]
五月雨[illegible]

[illegible]

五月雨や[illegible]の[illegible]の[illegible]

菖蒲

牛[illegible]事をアンて
菖松嶺や牛よ鞍うつ菖蒲葺
[illegible]
[illegible]

四植　早乙女

仙洞の古四植備て自歌[illegible]

蓋ゑれハ笑ふて踏る桂女うめ

柿しまハ青葉よりもゆる

隅田ハ業樹よりつゝ

ゆゝしき女の面やもゝ都多

ゆゝ女の姿しをゝん今地象形

竹蘭日

桂ゆゝ樹ゆゝ樹ゆゝ竹の屑

竹桂ゆゝ色ゝ竹燒しゆゝ

挑灯て竹桂ゆゝ物つゝれ

百合

姿ゆりの橋ゆゝ山の百合

百合の花切紙彫や小京乃

身をゝけゝ桂ゆゝ百合の花

人のまをゝてぬゝやゆりの花

紅花 鬼灯花

ゆゝつゝゆゝ抓て居るや和の花

鬼燈の赤しゝ桂ゆゝ

紫陽花 石菖

学問のかのうえまで修さ世ハ
学問をしよ小國なれとハ古て
ハなきまるや利休の姫奪の細き
石菖よりさくなる西なれ
石菖を一の巻や小風りう

廉子大串

壁の奥ふ風もふけや若き乗
奥さて戻て大串をよりう

水鶏

風ふくるうえの花のてハ降水鶏
屋ハ畑ふなる水鶏れ
厨ふうふ月近て降ふる
白風と立歩くよ降ふ鶏ハ

鳴雷巣

旅にても一度ハ何ふ雷巣ハ
降巣をとハふる猫よる小鼓巣
巣ふふくふ毎朝さ降るうき巣ハ

六月

六月を[illegible]と六月雪ー芭蕉

帷子羅

帷子を[illegible]も指さぬ[illegible]

為雪や[illegible]

雪ぬれ[illegible]

祇園会

[illegible]や[illegible]の[illegible]

山鉾の出[illegible]

暑

暑さ[illegible]

[illegible]と暑さ[illegible]

納涼 打水

[illegible]て涼んでゐる[illegible]

[illegible]の人を[illegible]

[illegible]向人[illegible]人

出て[illegible]て[illegible]

[illegible]る涼[illegible]

かのくとゝ男もあり　孫もあり

田家

もつまゝ　おもかげ　うつるもあり

青山　とゝ　水　おもかげ　薄　あり

夕立　雲峰

夕立　峰　雲　消　消

夕　ちの　雲　まく　白　赤　雲

夕立　雲　高　なる　峯　川

新　ゝ　疎　のき　ぬ　雲　の　峰

出雲峰

雲の峰　仏像の　ごとく　なり

旅　雲　小　の　ま　ま　雲　の　峰

青岸

富　の　ま　て　一　鞭　乗　る　や　青　海　色

青岸　頃　や　ゆく　船　ま　ち

本　乃　八　蕾　結　ま　ん　ま　青　岸

清水

煮　ま　て　法　ふ　し　ま　ち　小

出るまと出ぬうの行る情あり
雪のうかうよ情ゑうう春

蟬燈蛾

初蟬や格を去りて澄しけ
りうの一声や蟬時例よ蟬の声
唖蟬の捕れとき〳〵あるよう
雨和捕よりおきてゆう灯蛾
はうと春曲ゑうう火原も
釣豪や減ゑ包んとうう也

青田若竹

うう一の果ゑ
ゑゑ一のゑけうる青田柔
竹ゑよゑる竹白の柔白の若
若うう行種のうゑ通ゑ
苗ゑの苗や稼の下ゑゑ竹

合歓花蓮

ゑうう咲子外ぬ歓の花
昼ゑきるのけうく椒の花

蓬屋一古宮もりき何通を

唐歌夕照

もるる夜はやゝ二尺若しハ山の陰

梅高きまゝの新きもて

六歌仙の宗を今ゝ新生

夕歌の花の家よ小町車

内稜 芽稜

岩むらの古ハ稜のうしろ

抱上て鯉所ゝ古稜の形

山ゝゆる所ハ幅ゝき芽の稜小

新詠

ゆきのまゝ雪の下ゝ雑門の

芽ゝ戦ゝのゝ

唐ゝ詩の門戦ゝ糸の上

竹葉ゝ伸ゝ唐の中世戦小

南蛮

新詩ゝ唐物ゝ鳴の和

鳳朗叢句集後篇下

秋の部

立秋　初秋

秋あつや　帷子ねゝ　古屋　蓮
人よゝつ秋よ　おとろく　夕迄　茶
秋ゝつや　物干竿の　ちらく　と
蔦恒よ　蔦るの　ちく　やゝさの　秋
尚手ゝよ　秋や　家よ　凡　蔦　おとろき
初秋の　雲よ　ぬる　の　凡　ゆるゝ　凡

まつ秋とのこもゆきて新の家
豊田の吟
秋されはやさ高きる葉 宿
新源
屋敷の葉の乾よう 松枯家

稲妻

稲つまや人さ[illegible]しく間より
いなつまや差よさうぬまさら

七夕 天の川

七夕や白も入る遠行う
星の松星の梅のを富る
屋よりは星さえ[illegible]水引持
瞬きるしてぬをの門
多多けよ竜のつるや結河
押行手やまと間ハせぬをの門
四ゆく[illegible]や寒多ゆと学をの門

竜条

玉柳よつ以り利在面立茶

柳陰の路や去れども春の書

燈籠踊

淋や居丈高ゆる燈籠小
点ずつよ松の葉陰るもろ小
踊宵今家新のこるもろ小
稜さよ一紅ゆる踊の形
自ずつ踊者御し踊乱
踊場の去るうさつこもろ
ちろ場へよりけや山の雲

露　秋風

ちつ春や帷子ゆ縫ふ結ふ
上毛草庫家中
よろつ代の春の松の松の広松山
秋の風ちゝ拭ふ寄ふ春ふ
燈ふ寄ふ春ふ秋の風
興ふ照ふ水の多ふや秋のうせ
白の茅八重通ぬ秋の風
大の月ふ絹墨ふや向きの風

秋雨　秋海　秋水

掛子の花よりも降や　秋の海

夕ゝれの風光るなり　秋の海

灯ともせば昔のまゝや　秋の雨

霧

秋水のうく船見るもむさくるしく

ゆくゝれば椽先押しきたるなり

見渡せば一つゝれとのきうり哉

清水さゝえたる

木屋町や手拍さ一声峰の霧

盃

桐一葉

盃をとるや一巻の自

陣ゝゝゆるや屋敷の桐一葉

拾ひ人のつけて燃なり桐ひとた

ぬ情しさ掃もなる一葉哉

ふせて打伏て見る一葉哉

拾ひ捨も無量よ思ふ事ども

遠嶺の一すじまとうれぬ一茶小
雪の新の懶さるや白の相

新俳

為よりて秋さくぬ柳年
刈跡のるも寒き麻畠

新歌 女郎花

新点の罪ひて行や四のこゑ
新ゑや咲ふ一き車うるはき
伺さ点の咲新の百や生ゆきき

新点や五月雨の蒼ゑ新
新点のゑるて咲ぬ苔 塚
新点のまくにきるの花
女郎花ゑ咲ぬ八打ねる
打拍ぬ逢の手俳一女郎む
ゑるる恒松きき一咲き新
きゆゑ庭ゑ一るこの
ゑゑ手等のきゑ一ゑ
ゑ咲ゑ

まきれぬやれ付けるもきこえて

蕎

松尾の芒よ蕎て何きよりうこと稀ハ萩る者のきぬ芒あ
近つきよ多れハ蕎やきき蕎ハ
七咲きもあぬ蕎て芒きき
鶯ハぬるもなつけるききハ
作ゆ秋ハ萩よりう芒ハ種

萩

柳ちよ仏の出るや出れ萩
大堰ハまるきも出る萩の芒
大原ハ萩見て付て居る庵
萩よ原て出ハ人の世義ハ
夕の月の立ける萩のうしろハ
萩さくや今御乃ハ下の仏

葉蕎

葉の香の出つ見保せて捨ハ
芋陣温泉吹ハ

末てもあんよさう月ちの蔦　稽
衰へやゆくさる菊の夢

紫苑

紫陽花の蔦の跡行る紫苑小
ちれ蔦や紫苑蔦と下結の跡

芭蕉州萱

時雨るゝや生成の秋の空
州萱も行るや種とれし中

烏丸蕎麦萩

下るのよりはけれぬ[illegible]
唐さしを毛より八ちの[illegible]
内ちとれけ八水よ萩の寿

略

立のうちつゝ[illegible]ぬ蔦の略
和も撥て瓶使し唐の蔦
略蔦て巻の自秋と家より

憾悼

雪ちのと世ね八ちそ行老きりく行

浮世もも乗こそハみ　蕉

白のまつ生のてもなしきりく花

迷浮てみ　いろ〳〵のきく生

京の地よ乗こうつきを〳〵涙

悼と俳合ゆ実ちつ乳

秋懐

いつこ秋と尼遠して秋の懐

秋のてゝ布ゝ和歌ハうゝゝ

蝈蠡虫

去年ゆ俳ゆ悔ぬ稽先ん

俳ゆ去ゆ矣ゑこゝ矣ゝ

金波楼

手ちゝ〳〵ゝ角ゝ古の春

紫宇鳴子

古一度ゑ世て角きこゝし茶

まねるの繕きゆ切きぬ昭る縄

八朔

横西京雅記

八郎右衛門殿
種右衛門殿　我八郎の門の子
初月　待宵
猶は生子堂
石山寺焼窯跡
菊戸列焼流下
初月右衛門殿　篠塚よりの奈良の寄
待宵右衛門殿　月一ツ下がりの一き
まつ宵をきく名月の富士

待宵右衛門殿を見下し信濃山
月
名月の異さ跡の水の百ゑ
出候まて名月よる秋の事
名月右衛門殿　ゑ事ゑ事の
名月の筋遠よさ見事ゑ
之河の山ゑ
東ゑ名月の出さう
義彼ゑ

名月を所業の芋も穂ぬけたる
色よ紅ぬ紅葉なき秋の月
我宿をかるを雲て過る月萩薄
雲をくくしのくく月松杉
出たるれて雲と山の月萩小
月の色消よ出てくる雲を小
月よ緑て秋八色をなき石垣角
ひさよしのなく答し月の秋
青雲も晴しき秋を月の出る

おくるる一度て俗を月と秋
十六夜　立待月
十六夜や さびたる雲の新うき
ひさよしや やう時のふの月
立待や しさて手き水の音
立待や　三国八ま川向い
名月夜寒
名月や 寺柏ちる砂の上
竹柿ちる 雲乃の秋を小

人中より出て見れば行る秋哉小
又若ハ白のうつく秋哉小
雲と雲て絡る年ある秋哉小
手のうけよ菜や秋哉の雲の上小
糸筋や秋哉なるく柿の蔕
炬の火の爲ちる星の秋哉茅

秋哉うち哉

秋哉や出船よきし伊賀の松
うち哉やのうまてちる哉 雅

暴風

雲迫て白もなけなく野分小
海のうち下て稲押倒野分小

秋夕

寺井のうち下るや秋の雲
雁下ハ角そ出せ秋の夕
秋の雲押のけ先もうつうつ
る毎とハ高ハ高ぬ行きの夕
剣ゑるの行ちねても秋のそ

鶉の聲卑みる秋の夕毎に
和歌よハ三夕の歌も
寂ゆる年
大勢て行るよりの秋の暮

猪衣

手ぬぐ行ハ薄ハ尾花哉
行ハ三つ里より先のまぬさ小
遠くゝ言の先みる花哉
夕月や猪の上ゝ出る

山里を過る

捨田の四五段ゝ哉

新風

大坂を通る新風哉

葦穂 豆

葦の穂や中庵河内の長ゝ
旅寝ハ杖もとまる哉 豆 柳

麻屋

為つ蔕や降ぬ雨に河内国

初了の伝て色〻門田ふみ
ちら乃や何を思んて屋の内
初乃の山田あつけ〻絵きハ
春も越し〻この春も色ぬ殿る了
十相も来ぬ物者や秋の乃
春のつゆ化とよ分りぬ了の春
乃時や清き殿うる浦の家
秋風よ春ゆき乃とみうんふ
文科一名ふ向て向う乃のふと

渡者
みつきのうんて附於小者ふ
もらるのをさまるもつる面秋ハ
鶏鶏鶏
ハ絵ようきて人ゆ一俎の面
絵時て松のうきと家よふ
鶏者の中学て入るや歩行板
鶏鶏
伊勢の国よハ此ものゝ句

秋をしと雪て
うとの雪の白もふさんの初雁

鰍沼鮎

河原路や稲の下吹秋の風
門原の岸きし下や鰍みく
さい鮎のこのさみし信む水新小

九月

寒山茶よ長者のうゆる九月小
国もみ山路よ九月のの南九

菊

菊ひらく傳ハ何よるもし人を
白遠よ行や耳ぬ菊の花
うか加や七るのきくの家
岩本千河る孫の小黒し菊のむ
寿るよ家ハ菊ハ咲よりう
河まり行て雪るみき菊よ考う花
菊つけ千はのちひるや本新寿
長崎長味尾のけうよ

毎年生きて

庵菓の種子を蒔くなり

十日の菓

菓をまつるまれるハ時なり

殘菓

果るを待菓若干付着す

紅葉

義る夢ゝのなる紅葉

生向ゝ月と思ふや　夕もゝち

春ゝ雨ゝの宅きまの居る紅葉

下ゝ月ハ雨水も使もゝち

ゝのき迫ぬを迫和葉迫ゝ

子ゝて居る時ゝ水のゝち

后の月

明ぬ秋ハ必ゝ花と后の月

何ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ后ゝ

本嵐の毎ゝ月ゝ春ゝ月ゝ

毛の穴ゝ毛ゝ毛ゝ毛ゝ后の月

本草 秋時白露

始る木の実赤るく秋の実色々

秋時白露の霜光の冴うへ

露霜草枯 土枯色 草子 花

行秋

行秋や 紙打通る 宿の灯

秋さびしや 行るしまる秋の雨

行秋や 何て油虫 茨の炎

見さつけてやうみ雪 秋の秋

冬の部

十月

十月の 稲こき干るうす 藁束一把

十月さびしや 山よ 粕

十月や 弁当もらく 小松原

小春 小六月

炉の向ふ人 もらもく 小夜ふ

赤ふと 小夜の障子 柳生る

その頃よ 兎も生うす 小六月

冬日雨歌

秩父をまつれて冬のる雨小

冬の歌の興をとりて此一首

冬月

下枯の蓮よ土のつまるや冬の月

井蛙の井底門や冬の月

時雨

ちるとなくるよ袖れて初しぐれ

袖よ濡よ濡てまつれ俺よ

高砂をとりて

ちれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨

伊勢の上野よ長本の祭の

稲つませる社を時雨の雲

手をたれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨

雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨ちれ雨

先ハ市先ハ市先ハ市先ハ市先ハ市先ハ市先ハ市先ハ市先ハ市先ハ市

待ちよ八重桜の花の時雨

捨よ海よ身のまつまりよ時雨小

彼の上にうつしうつす朱
まもつて行きかるゝ時白の陽光の蟲
ひとよ中一株折つぬしれ小
枝を朱枝よりもるる時白ろ丸
朱ぬるしてゐる時間を八時白ろ
ゐるかのもとの時白のえきを小
時白ろ中よりの高飛まきゆふ
出うつる曲月を出て時白ろ
蔭をさへ遂にしれの枯むろ

物屑に倍門中ぬ冬の郷
新絡
しろろ寺凡新の中の立
菊島
何年毎時白を冬の花の立
風
出ろ一の水吹雪と朱よろ
人ろも出て人ろつく立さ小
雪

[illegible]る事きのうるや 格のうち
人数より之度物陰より事はうれ

[illegible]籠

老[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]も[illegible]を籠
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]も世[illegible]を籠
物[illegible]て[illegible]の書や[illegible]

火鉢 提火

桃象の[illegible]ゝ[illegible]る火鉢
[illegible]井より提火[illegible]る[illegible]

指火屏

[illegible]ゝ蕎麦[illegible]ゝ指ゝ
[illegible]ゝ[illegible]ゝ指[illegible]ゝ
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ指火
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]
[illegible]て京の[illegible]て指火
小屏風や指の燃る時ゝ
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ屏の用

屏風 [illegible]

ふんはりし蔵屋の押まけまう
秋立てまた犬さへ吼ぬ阿中庵

風呂吹

風呂吹のおしけ高や海ケ月

十夜法席講

門前の豆腐も休む十夜哉
名世話の吹聴も行ふ法席講

戰

行くすゑを細まり先を鎖渡

雲氷

うゑ乾る物嗜て痛る雲秋八
初氷秋しら石ケ八軍さうし
白さ月て雪塔のさる氷哉
江の立て種の氷八さんよう

雪

生つ童の行まを行まを色
初童八矢摺よ向る藤先来
童の白し行て降もせさうう

野の摩子童の外なる和尚
篠の家へのさ〜山子童の袖
庵のゝ八雲ゝ霧ゝ山桔童
よ〜雲山童ゝ花川〜乱

山吹丘

宇治川や童の脚を引流セ
ま生係てぬ〜ぬさ〜ぬき〜や童の著
之園の古幣のさ〜く吹童小
枝の手〜ゝ〜せて係童の袖ゝ乱

枯野

陳国へ枯ゝ〜る雲糸ゝ
風之八若草のゝ〜る枯雲茶
枝先て茨ねぬ枯雲ゝ車
ゝ毛て情さへ〜ぬ枯雲小
雲つゝき〜や雲ゝ枯ゝ見さゝ
庵ゝ〜む若ゝ枯雲の白い茶

蕎麦

倒ゝ行〜戸風のゝ〜蕎麦小

芒々たる蓼の穂と共に蓼葉小
庚申の咲かぬ蓮の蓼葉枯
星交て降る時雨の蓼葉小

帰花

何の花と二輪と咲花は蓼の枯葉

枯柳　枯蓼　枯芦

枯て止ぬ柳の幸と蓼の枯
枯蓼の枯て蓼は咲よりも
枯芦や去へ蓼花は水のよき

水鐸　葱

水仙の幸きを待て咲よりも
水仙の咲そろひぬそ蓼
葱の枯のふきも蓼く古巣小

所詠

蓼の枯ちらせて
蓼の穂の花ふき大根の車

千鳥

雲の奥や月を眺て降る雨

家婦として迎へ取りあげまゐらせ
候ハ、の子孫の留まるや松の月
二人居て手を取合ハ秋の雪
翁の大事仕る事ハ
尊き事老さらばり祥まる
時よりハ此世二つ門千年
拘換う海道ハ
是時の書を四よせぬまゐ

略

尼とよりハ松の尚一命の寿
二井とのうまの名あや深く命
何事も命の時分ハ為ぬ事

何孫 鮭

般若しらきれうて老
焼何孫の逢の仕人の寿
鮭一為元長者ならん

細代

打くハ八茶茶もうる細代の事

手度ハ四代の尊の名稱條

曆賣

係りのよ様なるこ出よう賣

敕恩講

敕物除よ紙金奏ハ素内

紙巾

門戒さハ門のこのこ紙こき

所門ハ松京筋ハ紙多き

紙巾敕ハこ眉の黒うし

自画像

新の書象敕ハ物ハ出ハ有

走入走内走ハ書る

家名ハ特ハ出るハ走の入

走内のうけるよ書ハ出うハ

走出書るハ多ハうま通よ竟

茶碗

多くさうよ多ハ十ハるハ茶碗

師走

[illegible]

書るるの毎日まるる師走かな

煤掃

[illegible]もうしけるや煤まい

追儺

豆撒や追へき鬼も来ぬ庭

鬼の外言てそこ[illegible]ハ居[illegible]

年仕舞　年木

もち屋世や面てをれて手仕舞

[illegible]

魚屋

投[illegible]る魚屋よりぬ面付状

佛名

仏名や世[illegible]のかハ陸ちき

年暮

年暮ぬ[illegible]ハ[illegible]

梅逆[illegible]のハ[illegible]書ぬ

[illegible]

打爾と高化さ手を百秋名
乃年と寿くの百の為兄ん 柴